

発表会の保育風景（「成長」は相乗作用によって）

平成 25 年 2 月 片山喜章

保育の世界では、子どもたちが舞台にあがって「劇」などをお披露目する会を昔から「生活発表会」と呼んでいます。“たいそうな名前だなあ〜”と、今も思っていますが、子どもにとって「生活」とは「成長」を意味するものでもありますから、その姿をお披露目するのだから「生活発表会」と言っても“まあ、いいか〜”とそのままにしています。しかしながら、いま、「生活発表会」に向けた取り組み風景を眺めていると、まさにこの練習過程のなかで教育の本質的な形が具体化され「成長作用」がはたらいていると実感します。主任やフリーの職員とともに、私も練習場面に突っ込みを入れたり、子どもとも台詞や立ちまわり方を、あれこれ作り出したりしていると、成長の主演は、子どもだけではないと感じます。

子どもの「成長」といっても様々で、何はともあれ、卒園して小学 1 年生の「生活」に対応できるように育ててくれれば良い、という自然な願いがあります。かつて「小 1 プロブレム」が話題になり、1 年生になって、授業中、理由もなく立ち歩く子が増え、それを幼稚園、保育園で自由にさせて躰ができていないからだ！という論調がマスコミや議員さんたちから湧き上がり大きな話題になりました（私の旧友に教育委員会のエライさんがいますが、決して幼稚園、保育園の問題ではなくて根の深い問題があると言っていました。当然です）。

しかし国民の過半数は「その通り」だと考えました。能力と魅力がっばいで、次代を担う“子ども”をそんなふうには扱えない、貧しい国家だと憂い涙しました。小学校 1 年生から 3 年生までの授業内容や形態を“根本的に！”改める、つまり、1 つの教室において、1 人の先生が 1 つの教科書を使って、30 名以上の子どもを相手に一斉に教えるスタイル自体、現代と言う特殊な時代においては機能しづらくなったということなのに、教科書を分厚くしたり、授業時間を増やすことが、良策だと考える国家の教育観にはウンザリします。

一方、人生 80 年を見越し、混迷を極める国際情勢とそのはざまに揺れる日本国の国民として“タフに生きる力”を身に着けるための「子どもの成長戦略」が必要だと考えます。

発表会の練習では、担任を中心とした保育者集団が劇に挑む子どもたちの意欲やイメージを豊かにするために、四苦八苦します。頭の固い保育者は、マイプランを子どもに押し付けてしまっていますが、例え、押し付けであっても、子どもには柔軟性がありますから、本番の舞台では観客を前に上手く演じて“成長”したように見えます。ここが保育評価のむずかしいところです。子どもにテーマを投げると個々の子どもから色んなアイデアが“変化球”として返ってきます。そこをどれだけ巧みにキャッチして、再び投げ返してキャッチボールをくり返せるか、そして形ある劇にしあげていく、子どもは、そこで本物の「成長」をします。

法人すべての園において、子どもの「成長」のためにキャッチボールの必要性は理解されていますから、保育者集団は、日々腕前が問われる試練の毎日です。生活発表会は、当日はさておき、子どもと保育者の「成長」を相乗的に促す行事だといえるでしょう。